

木材めり込みの 開祖研究者 構造家・稲山正弘

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■技術開発

「生まれは、知多半島」尾張人の答えが返る。1958年愛知県生まれの構造家稲山正弘さんは、東京大学大学院農学生命科学研究科教授。木質構造研究会会長、中大規模木造プレカット技術協会代表理事でもあり、木質系構造家として有名な木質系研究者。日本建築学会作品賞と松井源吾賞を岐阜県立森林アカデミーで2002年に受賞した（設計/北川原温）。杉山英男賞、JSCA賞等の受賞歴は2019年日本建築学会教育賞まで多数だ。子供時代から手を動かし絵を描くのが好きだった稲山さん。が、身近に建築関係者もなく東京大学理科I類入学当初には、学校独自のシステムである進学振り分け（通称進振り）で自分が建築を選ぶとは考えてもいなかった。内田祥哉研究室に入ったのは実践的なモノづくりがしたかったから。工業化に興味を持ちミサワホームに入社、技術開発の道を歩み始めた。日本は工業国だから生産から建築に取り組みたいという想いだったのです。

■ガウディ

構造体が隠される商品化住宅に疑問を感じていた3年目、スペインへ旅に出てガウディを見てショックを受ける。「これが本物の建築。構造とはこういうものだ」。これをきっかけに稲山正弘さんは退職を決意、1年後には母校東京大学大学院に進む。衝撃を受けた西洋の石の建築と同様、伝統的な日本の木造は、構造が現しになっていると気付いて木造の研究に邁進する。1990年に稲山建築設計事務所（現ホルツストラ）を立ち上げ、本格的に構造設計をはじめ。1992年に大学院を修了し工学博士を取得。アルセッド建築研究所の三井所清典さんとの実務や講習会は今も続いている。

地元の製材を使って栃木県馬頭町に、1998年いわむらかずお絵本の丘美術館で、野沢正光さんと協



働した。安藤直人東京大学教授が東京大学大学院生物材料科学専攻に、2005年社会人大学院木造建築コースを立ち上げたとき、稲山さんに白羽の矢が立ち准教授になる。そして、2012年には教授となったのです。

■地獄の面格子

「木造ラーメンの開発と研究」の軸はぶれていない。木材のめり込みを理論化すること。金物に頼らず木組で中大規模木造建築をと考える。めり込みだけで、耐震性能を満足できるはずなのである。98年「木造耐力壁ジャパンカップ」を発足させる。木造耐力壁のロボコン大会のような実戦大会は20年間続いた。第一回は稲山さんが設計した「地獄の面格子」がグランプリを獲得。いくら変形しても格子の相欠きがめり込みで抵抗して破壊しない構造だ。その後も金物を使わずめり込みで抵抗させる耐力壁で優勝を重ねてきたが、「ガチガチに金物で固めたものに何度も負けたけど」とゆとりで笑う。

公共建築物等における木材利用の促進に関する法律が施行され（2010年）、木造に追い風が吹きはじめ、稲山さんの東大木質材料科学研究室の人気は上昇し、優秀な学生が集まる研究室となったのでした。

「木造は軸と面や接合の組合せに工夫のしがいがあり、バリエーションが広いのがいい。若い人にどんどんやってほしい！」。活躍中の若手木質系構造家は、稲山さんから教授を受けている人が多い。中でも蒲池健さん（本コラム112回）の五月祭の作品の思い出話を、目を細めて語り出す教授なのです。